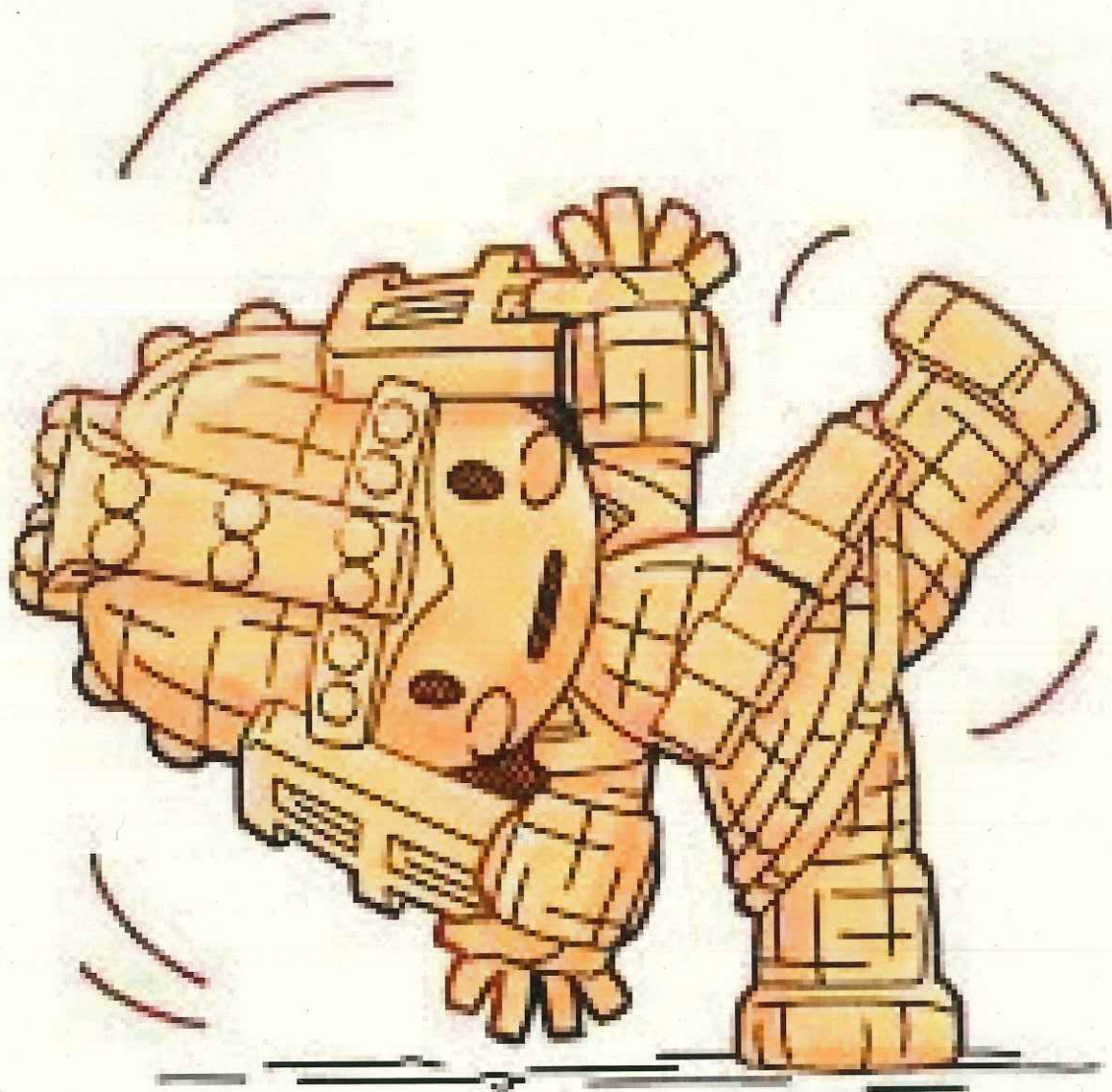


古墳時代の武器と武具

～1500年前にタイムスリップ!～



太田市立太田中学校 1年

塚本 さくら

1 きっかけ

争いといえば、鎌倉時代や室町時代、江戸時代などを思い浮かべる人が多いと思います。けれど、古墳時代にも武器の出土品があると知りました。私はこの時代でも争いを行っていたのかと疑問に思い、古墳時代の武器や武具について調べることにしました。

2 調査

まず、古墳時代について知るため、本やインターネットで調べることにしました。調べてみると、金井東裏遺跡に武具を身につけた古墳人が発掘されたことがわかりました。

6世紀に起きた榛名山の噴火で火砕流にのみこまれたこの地域には、貴重な遺跡が数多く残っています。そのため、直前まで人々が暮らしていた集落がそのままの姿で見つかることが多く、当時の生活を知る貴重な手がかりとなっています。私は、古墳時代の武器や武具について知るため金井東裏遺跡を調べようと思います。

「甲(よろい)を着た古墳人」の発見で注目を集める金井東裏遺跡ですが、この遺跡の南側に、もうひとつの重要な遺跡があります。それが、「金井下新田遺跡」であり、両者合わせて「金井遺跡群」と呼んでいます。

この遺跡は榛名山の2度の噴火に伴う火砕流によって埋没しており、数々の貴重な発掘成果をあげています。

(「東国文化副読本 2021年度版」,「古墳人、現る」を参考)



金井東裏遺跡

～金井東裏遺跡～

発掘された古墳人について

(「東国文化副読本」2021年度版,「古墳人、現る」,「埋文群馬」No.64を参考)

金井東裏遺跡からは4体の古墳人が発掘されています。

- ・甲を着た古墳人(1号人骨)

甲を着た状態の古墳人骨が見つかったのは新発見であったことから、「甲を着た古墳人」と名付けられました。この人骨が発見されたのは、溝の中でした。赤茶けて錆の塊と化した70cmほどの甲の一端から頭蓋骨、甲の両側から白色を帯びた上腕骨の一部が、やや湿った状態で土の中から覗いていました。頭を火砕流が襲ってくる西側に向けて、うつ伏せのまま両腕と両脚を折り曲げた状態で発見されています。後頭部の骨は失われています。推定身長164cmの熟年前半(おおよそ40代前半)の男性である古墳人が身に着けた甲冑を復元したところ、当時としては、国内最高峰の甲冑であることわかりました。「甲を着た古墳人」は既知の古墳人男性としては、やや背の高い人物だといわれています。また、顔面骨の特徴から、細い顔立ちに高く細い鼻の「渡来的形質」とされています。肩を頻りに回したり、乗馬や足を踏ん張るような運動に特徴的な筋肉の発達が見られるといえます。そして、左肩の発達が認められるので「左利き」の可能性も指摘されました。ウエストサイズが90~100cmの甲を着用しているので、肥満体ではなく締まった頑健(がんけん)な体つきだったと想像できそうです。



「甲を着た古墳人」レプリカ 発掘情報館

・乳児の古墳人(2号人骨)

「甲を着た古墳人」のすぐ近くから、頭骨の1部だけが発見され、その大きさなどから乳児だと考えられました。発見されたのは溝の中でしたが、誰かが抱えてきたか、あるいはここまで流されてきたのかわかりません。残念ながら性別や年齢はわかりませんでした。

・首飾りの古墳人(3号人骨)

「甲を着た古墳人」が発見された同じ溝の中で、16mあまり西に離れた場所から倒れ伏した状態の女性人骨が見つかりました。首の周りから、管玉とガラス小玉を連ねた首飾りがみつき、「首飾りの古墳人」と名付けられました。その姿は、異様なほどに腰をひねった状態で、迫る火砕流からそむけるように顔は横を向いていました。この女性の人骨は、頭蓋骨から脚の踵付近までが残っていて、推定身長144cm弱、古墳時代の女性人骨でもやや背の低い方であったことがわかりました。上下に高くない眼窩や下の顎の形、鼻幅が広いなどの顔面の特徴は、関東から東北地方にかけてみられる古墳人骨と同じだといえます。歯の状態からは、年齢が30代と推定されました。さらに、腰骨に残ったわずかな特徴から、経産婦の可能性が高いことも判明しています。また、筋肉の付き方は、限定できないまでも、何らかの肉体労働に従事したと考えておかしくない程度に発達していたらしいです。左腰付近からは、滑石製の雲珠玉点がまとまって出土しています。おそらくこの女性は、連ねた白玉を袋に入れて腰に提げていただろうと考えられます。

・幼児の古墳人(4号人骨)

他の古墳人と少し離れた場所から発見されました。頭骨と脚の1部の骨が見つかったのですが、乳歯から永久歯に生え変わる様子から、5歳前後の幼児と判定されました。ただし性別は分かりません。



「甲を着た古墳人」(1号人骨)



「乳児の古墳人」(2号人骨)



「首飾りの古墳人」(3号人骨)



「幼児の古墳人」(4号人骨)

「甲を着た古墳人だより」Vol.23



頭骨をもとに復顔したもの
歴史博物館

出土した武器・武具について

(「甲を着た古墳人だより」、「古墳人、現る」、「埋文群馬」を参考)

・「甲を着た古墳人」の甲(1号)



甲は、1800枚もの小札(こざね)という長方形の小さな鉄板を絹糸でつなぎ合わせた「小札甲」でした。小札甲は身体を動かしやすい一方で、制作には大量の鉄片が必要とされ、それをつなぎ合わせるには手間がかかります。当時、小札甲は朝鮮半島から伝わった先進的な武具であり、位の高い人が着用していたと考えられます。左の写真は復元された「甲を着た古墳人」です。この小札甲は14kgほどの重さと想定されています。

1500年も前のものなのに、何枚つなぎ合わせてあるかがわかっていてすごいと思いました。また、錆びた状態で発掘されたのに、いろいろな情報が読み取れて現代の技術はすごいと思いました。1800枚も小札がつなぎ合わせるのはすごく大変な作業だったと思います。だからこそ高い身分の人しか着れないんだと思いました。

・「甲を着た古墳人」西側から発見された甲(2号)



鉄製の2号甲は巻いた状態で発見されました。その下からは鹿角製小札(ろっかくせいこざね)50枚が発見されました。写真はレプリカです。甲は身体を防護するため丈夫な鉄製のほか、革製・木製が知られていますが、鹿角製小札は、日本初の発見でした。復元してみる

と、胸の上部にあった「胸当て」か、弓を引くときの脇を守る「脇当て」の可能性が高く、この部分だけが鹿角製だったと考えられています。

1号は「甲を着た古墳人」が着ていたけれど、2号は誰の甲なのか疑問に思いました。そしてどうして丸めてあったのかも気になりました。もしかしたら「甲を着た古墳人」が儀式をするために抱いて持ってきたのではと思いました。

・「甲を着た古墳人」が持っていた冑

冑は、約5～7枚の細い鉄板と約800枚の小札が使われた「衝角付冑(しょうかくつきかぶと)」であることが判明しています。頬当て、鍔(しころ)があります。

私は、「甲を着た古墳人」が山の神様に噴火を抑えてほしいと願い、儀式をしていたと思います。儀式をする際、敬意をあらわすために冑を脱いで頭を下げていたのではと思いました。そのため、冑が頭部の下にあったと想像します。

・「甲を着た古墳人」の近くから出土した鉄銚(てつほこ)と鉄鏃(てつぞく)

鉄銚は1点出土しています。鉄銚は、銀と直弧文(ちよっこもん)が線刻されている鹿角の飾りがありました。銀と鹿角製の飾り両方を付けた例は、国内では初めての発見です。また、鉄鏃25本出土しています。鉄鏃にも鹿角製とみられる球形の飾りが付けられていました。鹿角製の飾りを付けた例は極めて珍しいものです。

実用的な武器ではなく、権力の象徴だと見られます。鹿角は現代でいうアクセサリのようなものなのかと思いました。(左下.鹿角利用製品 発掘情報館 右下.発掘情報館)



金井東裏遺跡のことを知るために、「群馬県埋蔵文化財センター発掘情報館(以下発掘情報館)」に行ってきました。発掘情報館では「甲を着た古墳人」「首飾りの古墳人」のレプリカがおいてありました。骨がリアルで当時の噴火の怖さを実感しました。また、鉄銚、鉄鏃などの武器もありました。そして発掘情報館の職員の方に質問をさせていただきました。

Q&A 発掘情報館にて

Q1.鉄銚、鉄鏃は戦いの時に使うものですか？

A1.鉄銚、鉄鏃は戦いの時に使うものではなく、おまじないや魔除けとして使われていたのではと考えられている。理由としては、装飾がしてあったり、大きさが戦いには向いていないという点がある。また、鉄銚、鉄鏃などの武器は権力の象徴だと考えられている。

(感想)

私は、武器は戦いに使うものだと思っていたけれど、古墳時代の武器は戦いには使わないと聞きびっくりしました。装飾が施されている武器を見たけれど、やはり戦いに使うのはもったいないほどきれいでした。後で調べてみたところ、呪術的な文様が刻まれている刀も出土されているそうです。

Q2. 古墳時代の武具、武器の材料は鉄だけですか？

A2. 古墳時代は鉄が多かったと考えられている。弥生時代は銅が多かったと考えられている。鉄は朝鮮から来たもので、とても高価なものだった。

(感想)

私は、鉄は貴重なものなのに群馬県からたくさん出土していると知り、すごいと思いました。古墳時代の群馬県が東日本随一の大国であったことがうなずけます。

Q3. 「甲を着た古墳人」は常に甲を着ていたのですか？

A3. 常に甲を着ていたわけではないと考えられている。理由としては、甲の前がはだけていたことや、とても重いという点がある。甲も、鉄鉾や鉄鏃と同じように戦いに着ていくのではなく、他のムラの人たちに自分の権力を大きく見せ、戦いになる前に降伏させていたりしていた可能性がある。

(感想)

「甲を着た古墳人」と最初に聞いた時、戦いに行くところだったのかと思っていたけれど、全然違うことが分かって面白かったです。なぜ榛名山の大噴火の時にちょうど甲を着ていたのか疑問に思いました。

Q4. 「甲を着た古墳人」はなぜ逃げるほうではなく榛名山の方に向かってひざをつき、うつぶせにたおれていたのですか？

A4. 噴火を抑えるために神様にお祈りしていた場合がある。また、襲ってきた火砕流から身を守ろうとつさに身を伏せた可能性もある。もしくは、噴火の力で飛ばされてその状態になった可能性もある。

(感想)

「首飾りの古墳人」は逃げる方を向いていたから、「甲を着た古墳人」は、神様にお祈りをしていたか、つさに身を伏せた可能性が大きいと思った。流れ下る時速200kmの火砕流に祈りを捧げていたとすれば、勇敢なリーダーであったはずです。

Q5. 「甲を着た古墳人」は「渡来的形質」とされていますが、渡来人ですか？

A5. 純粋な渡来人ではなく、2世代ぐらい後の人だと考えられている。また、甲は誰でも着れるものではないことから「甲を着た古墳人」は位の高い人だと考えられる。

(感想)

5世紀後半に榛名山の麓を中心に、渡来系の人々が移り住んだそうです。渡来人が移り住んでくるということは、渡来人から見て群馬県が魅力的だったのだとわかり嬉しく思います。ムラの人々も渡来人のおかげでいろいろな技術を知ってドキドキしたと思います。

金井東裏遺跡では、「甲を着た古墳人(1号人骨)」「乳児の古墳人(2号人骨)」「首飾りの古墳人(3号人骨)」「幼児の古墳人(4号人骨)」の4体の古墳時代の人骨が発見されています。本によると、金井東裏遺跡に古墳時代のムラが営まれるようになったのは、5世紀中頃からなので、全員この村で生まれ育った古墳人と考えてもおかしくないそうですが、人骨の歯を調べた結果、群馬県以外で成長期を過ごしたことがわかりました。「甲を着た古墳人」「首飾りの古墳人」は、同じ地域で育った可能性が高く、その候補地として長野県南部が有力となっていて、大人になってから群馬に来たとされています。一方「幼児の古墳人」は、金井東裏遺跡に近い場所で成長したことがわかっています。



次に、金井遺跡群以外の武器や武具について知るために、「群馬県立歴史博物館(以下歴史博物館)」に行ってきました。歴史博物館では、古墳時代に群馬県で発掘された武器や武具、書物、国宝などを見ることができました。そして歴史博物館の学芸員の方に質問をさせていただきました。

Q&A 歴史博物館にて

Q1. この甲は古墳時代の人を着るには大きすぎないですか？

A1. 古墳人は甲をそのまま着ないで、甲の下に服を着ていたと考えられている。また、動きやすいように甲は少し大きめだったのではと考えられている。



⇒古墳時代・5世紀前半 鶴山古墳より
横矧板鋳留短甲(よこはぎいたびょうどたんこう)
小札鋳留衝角付冑(こざねびょうどめしょうかくつきかぶと)
小札鋳留眉庇付冑(こざねびょうどめまびさしつきかぶと)

(感想)

この短甲は、1枚の鉄の板でできているので小札甲に比べて動きづらそうに見えました。小札甲は動きやすいけれど作りづらく、短甲は動きづらいけれど作りやすいので一長一短だと思いました。

Q2. 甲が見つかったということは、この時期に争いがあったということですか？

A2. 戦いはあったと考えられている。しかし、甲は王様のような身分の高い人が儀式などで 着て、民に自分の権力をみせるためのものだと思われる。そのため、甲は戦うために身に つけてはいないと考えられている。

(感想)

武具だけれど戦いに使っていないと聞いてびっくりしました。では戦いでは何を使っていたのか疑問に思いました。

Q3. もし争いをするのであれば、誰が何を使って戦っていたのですか？

A3. ムラ人が毛皮や布で作られた甲を身に着け、弓矢や槍を使っていたと考えられている。この時代の刀は、日本刀のように反った刀ではなく直刀がであった。直刀は反ってない ため突くことしかできない。だから、弓矢や槍が使われていた。

(感想)

どんな時代でも戦いがあったと悲しいなと思いました。ムラ人たちの様子は弥生時代とあまり変わっていないのかなと思いました。

Q4. 鎧と甲はどちらも「よろい」と読むけれど何が違うのですか？

A4. 鎧は戦国時代などで使われたもので鉄や革などいろいろな材料を使っているけれど、甲 は鉄だけでできている。また、甲は甲冑からとっている。

次に私は国宝に指定された「綿貫観音山古墳出土品」を見ました。ここでは「甲冑をまとった武人」に注目しました。武人は墳丘の外側を向いて置かれていました。武人の埴輪に続いて並んでいた盾などの武具や馬などの埴輪列は、王の財力を示すものと考えられています。この埴輪は身長が136cmあり、人間と同じくらいの大きさで迫力がありました。埴輪は文字がほとんど使われていない古墳時代の歴史や風俗、習慣を知る大きな手がかりとなっています。この埴輪から古墳時代の武人の様子がよく分かりました。その時代の甲や武器がそのまま埴輪にされていて、発掘情報館のレプリカで見た「甲を着た古墳人」の姿を見ているようでした。突起付冑の突起は、朝鮮半島では身分を表すものとされています。ここで群馬と朝鮮半島との繋がりをみることができます。



埴輪からみる武器・武具

- ・小札甲
- ・突起付冑(鉄の冑の上に突起が付いている)
- ・顔を守る「頬当て」と「鍔」が付いている。
- ・弓矢入れの鞆(ゆぎ)を背中に背負っている。
- ・左手には弓
- ・右手には大刀(たち)
- ・下半身には「膝甲(ひざよろい)」と「臍当て(すねあて)」が付いている。

3 まとめ

甲などの武器や武具はあまり戦いには使っていなかったことが分かりました。甲は材料となる鉄が高価なものでかたんに手に入れられるものではありません。そのため、甲は身分の高い王様や長のような人が自分の権力を象徴させるために使っていました。鉄鉾、鉄鏃も甲と同じように装飾がされていたり、サイズが小さいことからおまじないや魔除けに使われていたそうです。

金井東裏遺跡では4体の古墳人が発掘されています。噴火で火山灰が降ったことにより、当時の様子がそのまま残っていて可愛そうですが奇跡の大発見となりました。「甲を着た古墳人」の甲は小札甲といい、多数の小札をつなぎ合わせてつくる当時の最新技術でした。しかし、作るのが大変な上高価な鉄が使われているので「甲を着た古墳人」はムラのリーダー的な人だったと考えられています。また、噴火する榛名山の方を向いて発見されたため、最後まで山の神にお祈りしていたとも考えられます。

歴史博物館で見た古墳時代の甲は短甲といい、1枚の鉄板で作られた古いタイプの甲でした。この短甲は弥生時代の頃は木製でしたが、金属製の素材へと変わるなど技術の進歩が見られました。また、この短甲も小札甲へと進化して行き、この先も進化を続けています。古墳時代の甲冑は戦国時代の大鎧とは比べ物にはなりません、ここから鎧の歴史が始まったと言っても過言ではありません。

古墳時代の争いはムラ人たちが毛皮や布の甲を身につけます。武器は弓矢や槍を使います。鉄製の甲などはムラ人たちは使うことができませんでした。

4 感想

私は今まで古墳時代について詳しく調べようとしたことはありませんでした。今回古墳時代について調べてみて、面白いということに気づきました。特に面白いと思ったのは埴輪です。私は今回武器・武具について調べていましたが、その武器・武具をまとめた埴輪(武人埴輪)があることを初めて知りました。武人埴輪は粘土で作られている気がしないほど細部まで細かく作られていました。本当に自分と同じ人間が作ったのかとすごくびっくりしました。今度は埴輪について調べたいと思いました。

今回の研究で私は、ここ数十年の間に榛名山の噴火によって火山灰に埋もれた古墳時代のムラの遺跡が次々発見されていることを知りました。発見された遺跡の中には、火山灰に埋もれていたことで、建物や畑、道、生活の跡などはっきりと残されているものがあります。私はその遺跡から、古墳時代の様子をいろいろ想像することができ大変楽しかったです。噴火で埋もれた町として、イタリアのポンペイの遺跡は世界遺産に登録されています。ポンペイのように群馬にも多くの人が訪れて欲しいと思いました。

私は群馬に住んでいるのに東国文化を知らないのはもったいないと思いました。しかし、群馬の魅力を知らない人はまだまだたくさんいると思います。そのため、これからも東国文化について調べて、群馬の魅力を多くの人に伝えていきたいと思っています。

本研究に協力して下さった発掘情報館、歴史博物館の皆様には深くお礼申し上げます。

5 参考文献

- ・群馬県「東国文化副読本～古代ぐんまを探検しよう～」, 2021年
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団「古墳人、現る—金井東裏遺跡の奇跡—」上毛新聞社, 2019年
- ・朝日新聞DIGITAL (2020,6,13)
- ・「金井東裏遺跡 甲を着た古墳人だより」vol.1～ vol.23,群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・「一冊でわかる イラストでわかる 図解 古代史」成美堂出版, 2013年
- ・「埋文群馬」No.64,群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2019年
- ・刀剣ワールド 甲冑の歴史 (<http://www.touken-world.jp>)
- ・「古墳時代のサバイバル」朝日新聞出版, 2017年



古墳時代の甲を着たぐんまちゃん
群馬県のマスコット「ぐんまちゃん」(登録商標)25-100461